

バの山、ヨーロッパの高山フロラ、及び高山植生等がついていて写真を補足している。
6,000円。 (前川文夫)

□Rolf Sattler: *Organogenesis of Flowers, A Photographic Text-Atlas.* 208 pp. University of Toronto Press. 1973. 著者は Montreal の McGill University で植物形態学と科学史を講じている。高等植物の花部形態学及びそれに基礎を置く系統分類学は、主観的な解釈の錯綜によって長年毒されつづけ、実質的な発展をしていないと考え、器官の相同関係 (homology) を客観的に認定する方法を求めてきた。そして結局のところ、それは解釈を新しくするだけでは解決できず、具体的な研究方法を根本的に改める必要があるとしている。著者は自ら開発した実体顕微鏡を用いて、花芽の成長点を切り取り、生きたまま表面の写真をとることで多くの研究を行なった。この本はその現在までの成果の集大成であり、被子植物の各群から代表的な植物 50 種を選んで、合計 1200 枚にのぼる実体顕微鏡写真をかかげている。このような試みが Payer (1857) 以来行なわれていないのは驚くべきことである。ここでは解釈を含む用語 (interpretive terms) はすべて避けられている。例えば *carpel* という言葉は我々が長年親しんでいるものであるが、この本では用いられず、*pistil* 或いは *ovary* という言葉に置きかえられている。また *fusion* という言葉は発生過程で実際に起る融合 (ontogenetical fusion) に限定され、いわゆる *congenital fusion* は排除されている。興味ある実例の一つを示すと、*Alisma* の花芽ではまず 3 個のがく片の原基ができる、次にこれと互生する位置に 3 個のふくらみができる。それぞれのふくらみは成長するにつれて 3 つの部分に分裂し 1 個の花弁と 2 個の雄蕊となる。この 1 花弁 + 2 雄蕊の共通の原基と互生する位置にまた 3 個のふくらみができる、これが成長するにつれて分裂していくつかの心皮 (著者によると *pistil*) になる。すべてこのような調子で事実のみが記述され、それに対する解釈は一切行なわれていない。もちろんこのような表面観のみの観察で器官の発生の体系が作れるわけではなく、さらに重要なのは内部構造の発生 (histogenesis) であることは著者も認めるところである。しかしその方法はまだ確立されていない。この困難な課題に取り組んだ最初の試みとして、我々を啓発すること大であり、さらに今後の展開が期待される。 (山下貴司)

○高等植物分布資料 (85) Materials for the distribution of vascular plants in Japan (85)

○ハンノキ *Alnus japonica* (Thunb.) Steud. ハンノキは北日本に多く、好んで湿地に生えるが九州では珍しい。九州の西側では、焼物の産地として名高い佐賀県有田付近と、有田に近い長崎県波佐見町に知られていた。ところが近年大村湾の南岸に近い諫早市真崎町の谷あいの湿地で上野二巳氏がみつけた。数量も可なりである。今のところ、ここが九州西岸の南限と思われる。 (外山三郎)